

仲間（奉公人）の身分と役割

「仲間」と呼ばれる武家屋敷の奉公人を知ることを通して、観光客は、江戸時代（1603—1867）の武家の生活をより深く理解することができます。

仲間とは：

仲間に関して初めて言及されたのは、鎌倉時代（1185—1333）です。当時、彼らは武士に伴われる低い位の兵士たちでした。彼らが仲間（粗く訳すと「中間」といった意味合い）と呼ばれたのは、武士階級と、最下級の兵士たちである「足軽」や「小者」（通信役や、荷物運びを担った者）の中間に、彼らの階級が位置付けられたためだと言われています。

江戸時代に入ると、仲間は特定の武家に代々仕えるようになりました。仲間に関しては、武家の家族に忠実に尽くす代わりに大切に扱われるといった、互恵的な結びつきを形成していたといった逸話があります。その一方で、他方で武士の権威を私欲のために利用する仲間もいたようです。

仲間には屋敷に通勤する者もいましたが、他の者は「長屋門」の中に住んでいました。

生活：

1830～1868 年にかけて、仲間の年間給与の市場平均は、米 360 キログラムあるいは 3 両でした。両は当時の通貨単位です。彼らはまた、毎日、玄米 5 杯分を与えられました。仲間は通常、主人の家で食事を与えられましたが、かなり貧しく、多くが生涯未婚のままでした。時には、彼らは主人が使わなくなった服を譲り受け着用することもありました。多くの者は、貧しさのため、藁のサンダルを作ったり、盆栽（小さい木）を栽培したりするといった副業を行いました。

衣類：

仲間は通常、自前で作った綿の服を身に着けていました。しかし、彼らが公用で主人に同行しなければならない時は、彼らは主人の家に特有のシンボルが入った服を提供されたようです。槍持ち、草鞋取り、傘持ちは、しばしば主人の家の家紋を背に入れた法被を着用しました。「挟箱」（衣服の替えを入れた箱）を運ぶ人や、他の荷物担ぎ手は紺や黄色の紋付き法被を身に付けました。新年や主人の家の子どものお祝いといった特別な場合にも、仲間には法被が支給されました。

仕事：

裕福な家庭における仲間の職務は、仲間たちの中における各々の立場に基づいて役割分担されていました。しかし、裕福ではない武家の場合、仲間はしばしば複数の職務を同時に負わなければなりませんでした。

原則として、仲間の仕事は、長屋門内で敷地内外の交通を監視したり、敷地を管理し掃除をしたり、水を運んで来たり、お風呂を焚いたり、馬の世話をしたり、外出時に主人に同行したりすることでした。彼らの主人に同行するとき、槍、草鞋、衣類を詰めたトランクを持つほか、馬の誘導を行いました。上級武士に仕える仲間は、主人を入れる駕籠を持ったかもしれません。